

葉付きタマネギ栽培に適した品種と株間及び播種時期

○安水義寿・原田昭夫・永田茂穂¹⁾
(鹿児島農総七六隅・¹⁾鹿児島農総七)

【目的】

鹿児島県では、冬期の温暖な気候を活かした冬春期野菜の生産が盛んである。タマネギについても、水田の高度利用等の中で取り組まれている。従来は、3月中旬頃からの出荷を前提とした栽培が行われており、それより早期に肥大した株を葉付きタマネギとして、間引き収穫していた。間引き収穫では、収穫に時間がかかり、収量も不安定である。そこで、今回、葉付きタマネギの適品種と栽培法について検討した。

【材料および方法】

試験1:品種及び株間の影響(2005年)

品種は‘貴錦’、‘春香’を供試した。9月7日に288穴セルトレイに播種し、支場内ガラス室で育苗した。株間は10cm, 15cm, 20cmの3水準とし、畦幅150cmで、10月18日に定植した。

試験2:播種期と株間の影響(2006年)

品種は‘春香’を供試し、播種期は8月29日, 9月11日, 9月22日の3水準, 株間は8cm, 10cmの2水準とした。定植期は、それぞれ、10月6日, 10月16日, 10月26日とした。畦幅, 育苗法については、試験Iに進じた。

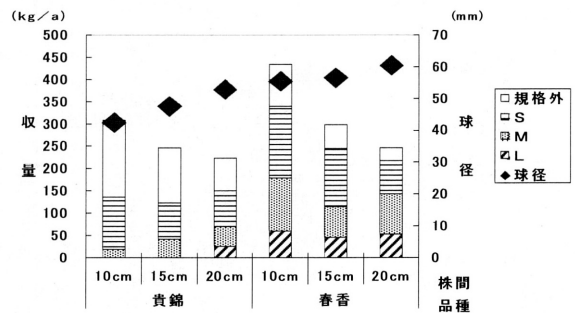
【結果および考察】

試験1:球径は、品種の違いによる有意な差がみられ、‘春香’が‘貴錦’に比べて大きく、加えて、株間が広いほど大きい傾向であった。可販収量は、‘春香’が‘貴錦’に比べて多かった。いずれの品種とも株間が狭い場合に収量は多く、‘春香’では可販収量もこれに対応したが、‘貴錦’では、株間が狭いほど規格外収量が増加した。(第1図)。

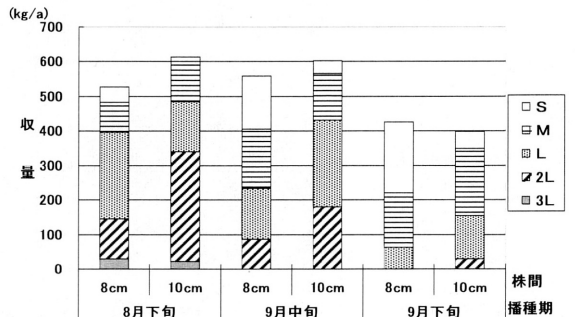
試験2:2月16日のM規格以上の収量は、8月下旬播種が最も多く、播種期が早いほど多い傾向であった。株間については、10cmが8cmに比べて多かった。(第2図, 第1表)。3月5日の収量調査では、8月下旬播種および9月中旬播種は、完全分球等の障害球の発生割合が高くなったことから、可販収量は2月16日調査時よりも少なくなった。(第3図, 第1表)。

以上のことから、出荷期の早進化を目的とした

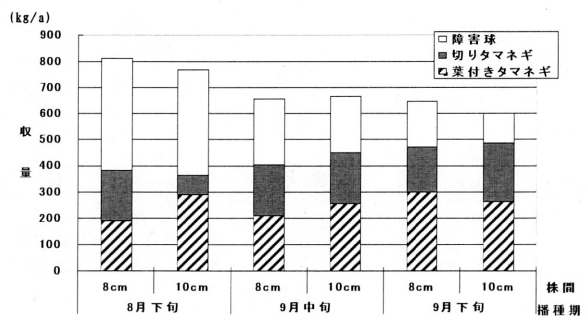
葉付きタマネギの栽培では、品種は‘春香’が‘貴錦’に比べて肥大に優れた。株間は狭いほど収量は多かったが、10cmが限界と考えられた。播種期は、8月下旬播種が適期であったが、収穫期が遅れると障害球の発生等による減収が懸念された。



第1図 球径と規格別収量(収穫:2006年2月20日)
注) 球径:10cm>2L≥8cm>L≥7cm>M≥6cm>S≥5cm



第2図 播種期・株間別収量(収穫:2007年2月16日)



第3図 播種期・株間別収量(収穫:2007年3月5日)

第1表 収量に及ぼす播種期・株間の分散分析

	2月16日		3月5日			
	M規格以上	可販収量	葉付き収量	切り玉収量	可販収量	障害球収量
X1播種期	*	**	NS	NS	(*)	**
X2株間	*	NS	NS	NS	NS	NS
X1播種期×X2株間	NS	NS	NS	NS	NS	NS

注) **1%, *5%, (*) 10%水準で有意。NS は有意差なし。